

先生
こんにちは！

エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン

陣内秀信先生 (建築学科)

建築の世界を目指した経緯

——先生はどんな経緯で建築を目指されたのですか？

陣内 父親が関門トンネルを造った土木技師という、ものづくりの環境で育ったんです。中学、高校時代は住宅や建築が素直に好きで、名古屋の未来的な都市計画などのアーバンデザインにも興味がありました。

——建築のなかでも歴史へ進んだわけは？

陣内 建築を目指して大学に進んだので、普通なら素直にデザイン分野に進んだのですが、私の学生時代は東大闘争、万博批判や建築家不要論も盛んで、批判精神ばかり植え付けられたので、設計やデザインに素直に入れない心境でした。バナキュラーな建築の方が魅力的で、早くから自然に、歴史と都市の面白さにひかれて、歴史に進んじやったのです。

ベネチアとの出会い

——陣内先生という誰でもヴェネチアを思い浮かべてしまいますが、先生のヴェネチアとの出会いは？

陣内 卒論でヨーロッパの中世都市を研究したんですが、九州育ちの血の中に、体制的でアカデミックな道は行きたいという反骨精神があるんですね。イギリスやフランスではなくイタリアを目指しちゃったんです。

父が高校時代を過ごした鹿児島の雰囲気ナポリに近かったせいもあってイタリアには関心があったんです。修士1年の夏にヨーロッパを旅行してすっかりイタリアが気に入ってしまいました。

ヴェネチア建築大学に留学してムラトーニの実践的都市史に出会いました。ヴェネチアは小さくて全体が中世そのもので、ほんとに魅力的だったんです。運河、広場、道の表情、住宅のプランニングなど、都市を読む環境要素がそろって

います。1940年代の下宿に住んでいたんですが、目の前に運河、カモメ、ゴンドラ、カンツォーネと体で水の都市の良さを感じました。

水の都市、江戸東京の研究

——日本に戻ってこられて、東京の研究に取り組みますね。

陣内 日本に戻って法政で教え始め、学生と「東京のまち研究会」をつくり、第一段下谷根岸、第二段山の手と調査をつづけ、第三段近代で同潤会と出会い、同時に運河沿いに良い近代建築、広場、橋があることに気づきました。1920年代の震災復興の東京を描きながら、結果的には水辺を歩いていた。船で回ってみて、水の側から観て、水の都市東京とベネチアの思いが重なった。ムラトーニの実践的都市史、古い資料で歴史を組み立てるのではなく今の都市をサーベイして図面化すると、そのなかに歴史の情報が全て入っている。一度出来上がったシステムは簡単に崩れるはずがない。丁寧に読み解くと都市と歴史が結びつく。東京山の手を観る時にその方法が役立ち、江戸時代の地図と現代の地図がピッタリ重なった。江戸と東京が結びついたんです。

エコ地域デザイン研究所

——エコ研が2年目にはいりました。

陣内 エコロジーと歴史というテーマは河原先生や神谷さんがすでに先行して進めていたものでした。法政は文科系にも「都市政策公開講座」があり30年続けていました。このような蓄積のうえに「エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン」の国際シンポジウムを開催。清成総長が深く理解して応援していただいたおかげで、昨年、学術フロンティアが取れた。これは私立大学向けの研究支援の制度で、大学と文部科学省で半分ずつ負担する。期間五年間ですが、エコ研を正



陣内秀信教授 1947年福岡県生まれ

式に立ち上げて今年で二年目です。

——ずいぶん大掛かりな研究を進めておられるようですね。

陣内 日本、アジア、ヨーロッパと世界規模でフィールド調査を実施中です。エコ研の四つの柱、歴史、エコロジー、地域マネジメント、都市再生プロジェクトと工学部と文科系とつなぐ横断的なネットワークをつくって進めています。現在、アムステルダム、東京、ベネチアの3都市を洪水テーマに比較するロッテルダム建築ビエンナーレ展（5/26～9/4）に幕末の江戸の都市模型等を出品中ですが、これを来年1月に江戸博で公開する予定です。

詳しくは<http://www.eco-history.com/>をご覧ください。

（聞き手：石黒豊明）

